

## 国際シンポジウム二

## 《講演録》教育・保育の素材のための古事記神話の再話について考える

原田 留美

皆さまこんにちは。東京都市大学の原田と申します。私は國學院の教員ではありませんし、出身も別の大学ですが、れども、ご縁をいただきまして、今日、この場に立たせていただいております。何卒よろしくお願いいたします。私も普段の仕事は幼稚園教諭、保育士の養成です。東京都市大学、児童学科所属ですが、そこでそういう道を目指す学生を育てる仕事しております。

そうは申しませんが、実は私の元々の研究のフィールドは古代文学で、いわゆる保育、幼児教育ではなくて、さまざまな経緯があつて、今こういう仕事をしておりますが、文学研究が専門分野ということで、作品論の形でいろいろなことを考えてきたという経緯がございます。

今、吉永先生のお話にもありましたけれども、二十三年度の教育指導要領改訂の中で、日本の神話をリライトしたものが低学年の子どもたち向けの教材として採用されるという話を聞いたときに、非常に興味を持ちました。どんなふうのリライトされるのか、作品としてはどんなふうになるのかということ、そこから七、八年になりますでしょうか、いろいろなことを考えたり、書いたりということをし続けております。

これからお聞きいただく話もその作品論がベースになっていまして、今の吉永先生のお話は本当に実践と結びついた大変興味深いお話でしたけれども、私の場合は、教材論という、あるいは素材論と呼ぶ方もいらっしゃるようですが、教材として使う作品がどういう姿をしているか、どういう性格のものかということが中心のお話になります。

本日の大きなタイトルが「『子ども古事記』がひらく世界」ということですが、『古事記』には、後ほどお話ししますけれども、神話だけではなくて、歴史時代の話もたくさん入っています。ただ、現時点の私の関心の対象が神話なので、『古事記』全体ではなくて、申し訳ありませんが、神話に偏ったお話になると思います。その辺り、お許しただけたらと思います。

さて、今回このお話をいただいた時に、どういう話をしたらよろしいでしょうかとお問い合わせをしたところ、『古事記』とはどういう書物か、そして古事記神話を幼年期——幼年期というのは、私は大体、年長さんから小学校二年生ぐらいまでの子どもをイメージして使っていますが——の子どもたち向けの教材として採用する場合の課題等について話をしてほしいという二題が出ております。限られた時間なので、どこまでお話しできるか、雑ばくな話になるかもしれませんが、よろしくお願いいたします。

予稿集の資料には、本日の話の概略の他に、日本神話と『古事記』の神話の流れの簡単な説明を載せております。実は、今回お呼びくださった古事記学センターのサイトに非常に分かりやすい『古事記』の流れが書かれていますので、ぜひ後で、インターネットでご覧になることをお勧めします。私の資料に載っておりますのは、それよりはもっと軽い一行、二行のものであります。参考にしていただければと思います。

もう一つ、現在入手しやすい『古事記』の再話絵本や、小学校の教科書に載っている再話作品の簡単な紹介を資料

の後ろのほうに載せております。ただ、小学校の教科書掲載作品は現行のもので、もしかすると来年度から使われる新しい教科書では多少変わるかもしれません。そこは未確認なので、現行のことですので、その点をご了解いただきたいと思います。

では、本題に入ります。まず『古事記』とはどういう書物か。このお題をいただいた時に、正直、頭を抱えました。私などがお話しできるような問題ではなく、それこそ多くの『古事記』研究者が取り組まれている重要な課題です。私がこれからお話しすることは本当にその上辺だけです、そのあたりをお許しいただきたいと思えます。なお、この問題につきましても、古事記学センターのサイトでかなり丁寧な解説がありますので、ぜひ後であわせてお読みになったらよろしいかと思えます。

『古事記』は、日本に伝わる現存最古の歴史書といわれています。上中下巻の三巻構成で、いわゆる古事記神話为上巻にまとめられています。八世紀初めの日本人にとっての昔の出来事を記したものと共通理解がなされており、ます。

『古事記』はどのような経緯で成り立ったかというのは、実はここが研究上の重大な課題の一つなんですけれども、序といわれるものが付いておりまして、そこに経緯が書かれています。天武天皇が、さまざまな豪族が所蔵している歴史的な記録、帝紀とか本辞といわれる歴史的な記録には嘘が多いと。正しい伝えを後世に残したいということで、稗田阿礼にそれを誦み習わせたと序に書かれています。その後、稗田阿礼が誦み習った旧事を選録して、献上しなさいと元明天皇が太安万侶に命じます。そして和銅五年（七一二）に太安万侶が献上したのが『古事記』だということに序ではなっています。

ですが、この序については、細かいことは申しませんが、信頼性、それが『古事記』の成立の経緯をどこまで伝えているのかというのが研究上の大課題でありまして、いまだに定説を見ない。興味深い説はたくさんありますけれども、序を信頼してよいと考える研究者と、これは信頼できないと考える研究者と、一部は信頼していいんじゃないかという研究者と、様々なようです。成立の経緯についてもいろいろあるということはお伝えしておきたいと思っています。

『古事記』については、実は序以外に成立の経緯を伝える文献はありません。『日本書紀』の場合は、『続日本記』という後世に編さんされた歴史書に載っています。この時にできました、ということが、『古事記』にはそういう記録がほかにないんです。そういう意味でも、非常に謎の多い不思議な書物と言いうことができると思います。

『古事記』と『日本書紀』はご存じのとおり、非常に近接した時期に成立しています。七二二年と七二〇年ですが、「風土記」も少し後に成立していますけれども、この頃の時代背景を押さえておいたほうがいいと思うので、簡単にご説明しますと、国内的にも国外的にも動乱の時代だったわけです。唐が強い力を持っていて、新羅も強い力を持っていて、東アジア全体が揺れ動いている中、日本の国内では内乱が起きている、そういう状態の中で日本の国家としてのスタイルというものをつくっていかないと潰されてしまう、さあ、どうしましょうということ、いろいろなことを当時の日本人はしましたが、その活動のうちのひとつとして『古事記』や『日本書紀』が編さんされたと思なされています。

ただ、先ほども言いましたけれども、『古事記』が成立した八年後に『日本書紀』が成立しているんです。収載年代もかなり重なっていますので、共通する事項も多い。一方で、相違点もある。でもやっぱり似ている。なぜこの似

た二つの書籍が続けて作られたのかが分からない。これも研究上の大きな課題の一つです。

『古事記』と『日本書紀』、どんなところが違うかという点、『日本書紀』は律令国家の正史として編さんされたものになっています。そして、巻によってさまざまな状況があるようですけれど、比較的きちんとした漢文体で書かれています。『古事記』はそうではありません。それから、『日本書紀』のほうは、文字とか仏教、暦など、当時の世界標準の文化の受け入れについても非常に積極的に触れています。『古事記』はそういうところには、あまり関心を払っていない。

神話部分について大きな違いを述べますと、『古事記』は一連の物語として編さんという点か、編集、まとめられて載っている。『日本書紀』のほうは、異説がたくさん併記されている、そういう違いがあります。また、『古事記』のほうが高天原の神々から連なる天皇中心の世界の成立を強く意識しています。そして、『古事記』は出雲の神々の物語を載せていますが、『日本書紀』は出雲の神々を載せるのにはあまり積極的ではないです。

先ほども申しましたけれども、なぜ正史『日本書紀』の他に『古事記』が編さんされたのか、これは私には答えがないので申し訳ありません。こういうことが問題になっていますということだけをスライドに載せて、お茶を濁させていただきます。

今お話しさせていただいたように、『古事記』は、七世紀から八世紀における国家体制の整備の中で編さんされました。当然、当時の政治的な状況が色濃く反映していると考えられます。

ちょっと補足をさせていただきたいのですが、『古事記』というのは、政治的な文献であるということがよく言われますけれども、『古事記』の政治性と言ったとき、どうも世間的には誤解があるような気がする。

七十年前に大きな戦争があつて、そこで日本は負けました。日本も傷つき、周囲の国々も大いに傷つけたという経緯がありましたけれども、その戦争の最中に『古事記』や『万葉集』が非常にいいように——ご都合主義的に、とあえて私は申しますが、使われた。そういうことが記憶に残っているものですから、『古事記』は政治的な文献であるという、ここ百年足らずの日本の歴史や政治と結び付けて解釈、あるいは理解されることがあるようですが、それは違つと、ここは強調しておきたいと思ひます。

『古事記』の政治性は、千三百年前の日本列島および東アジアを中心とした世界の政治的な状況の中で編さんされたことと関係しているものであつて、七十年前の戦争と直接に関わるものではありません。

それから、『古事記』は政治性が強いと言われる一方で、そこに載っている神話は、日本列島の中で古来共有されてきた、いわゆる自然神話であるという捉え方もあるようですが、これも違います。

自然神話というのは、特定の集団の中に素朴な形で語り伝えられていた世界の始まり、あるいは世の中のシステムの始まりを伝える神々の物語のことですが、『古事記』はそのようなものとは一線を画するものです。ある時期に一定の意図の下に編さんされたものですから、自然神話ではない。ただし、『古事記』の素材となった物語の中には自然神話がかなり含まれていたと考えられています。それだけではなくて、外国の神話、説話も含まれているということが分かってきます。非常に多様な面を持ち、多彩な素材をもって編さんされている不思議なというか、興味深い謎深い書物であるということを最後にもう一度、強調しておきたいと思ひます。

それでは次、幼年期の子どもと『古事記』の神話作品についてお話をしていきたいと思ひますけれども、『古事記』の話に入る前に、物語に親しむ意義についてお話をさせていただきたい。

小さい子どもたちは遊びながら発達を遂げていきますけれども、幼児の場合、最初は平行遊びと言うんですが、一人一人ばらばらな状態で遊び出します。三歳の後半ぐらいになると、発達してくるので、友達と一緒に遊びが組み合うようになっていきます。集団遊びを豊かに展開する要素として、実は物語というのは非常に強い力を発揮することがある。面白い事例が幾つもあるんですが、今日は時間がないので省略させていただきますけれども、そういう力が物語にはあります。

また、日常とは異なる世界を登場人物と共に遊ぶことで、世の中にはさまざまな人や考え方、事、物があることを知っていきます。さらに、心惹かれるのはどのようなものかについて気付いていく、世界と自分が出会う、そういう重要な体験を生みます。

それから、物語には、物事を認識、理解する際に、枠組みとして非常に有効に働く可能性があるのではないか。エビデンスがあつて言っているわけではないですが、最近、そういうことを考え始めました。

話は横にずれますが、昨日たまたま最後の資料チェックをしていたときに、國學院大学のサイトのトップページで、副学長先生が、物語は人間にとってどういう力があるかということを語っていらつしやることに気づきました。私が考えていることと重なることをおっしゃっていらして、心強く思いました。國學院大学の宣伝ばかりをしているようですが、後でトップページをご覧になって、お読みいただきたい。文学というものが人間の生きる力にどれくらい深く関与するかということが書かれていますので、ぜひご覧いただきたいと思います。

神話と子どもの方に話を戻します。神話はこの世の起源を語る話です。世界観を楽しむ物語で、登場人物は、天上とか地上とか地下や死の世界を非常に頻繁に行き来します。いわゆる一般的な昔話よりも、ダイナミックで複雑な物

語の楽しみを味わうことができます。そこが面白いということをお伝えしておきたいと思います。

ただし、ダイナミックであり複雑な分だけ、幼年期の子どもには結構難しい場合があります。特に『古事記』の神話の場合は、この世、空間の秩序の成立を一連の物語の中で語ります。非常に長いです。それは幼年期の子どもたちには厳しい。

さらに、先ほど吉永先生が例に挙げられた『いなばのしろうさぎ』がいい例ですけれども、舞台転換と登場人物の入れ替わりが非常に多い。幼い子どもの場合、舞台転換や登場人物の出入りが多いと、理解が難しくなります。三歳以下の子どもには極めて難しいと思います。就学前後の子どもであっても、相当工夫してリライトしないと、難しいと思います。

そもそも、神話は起源や由来を語る物語ですが、由来話を理解するには、ある程度の発達が必要で、昔話にも「海の水はなぜ辛い」など、由来話はいろいろありますが、そういう話が本当の意味でわかるようになるのは五歳くらいからと、保育の場では言われています。

あとは、古代独自の価値観や社会常識を基に書かれていますので、大人も含めた今の我々にはなじみない要素と多いのが多い。特に小さい子どもは、違和感を覚える可能性が高いかもしれない。ただ、子どもは頭が柔らかいですし、ファンタスティックな絵本をたくさん読んでるので、意外とすんなりと乗り越えてしまう可能性も考えられるということも申し添えておきたいと思います。

このように、幼い子どもが古事記神話に親しむにはいろいろと壁がありますが、それでも古事記神話を楽しむことに意味があるならば、それはどういったものなのか。



先ほど、古事記神話の物語構造は複雑だと申しましたが、神話も説話の一種ですので、細かい心情描写はあまりなく、シンプルな出来事の展開に沿って読み進む物語がほとんどです。だからその意味では、分かりやすい。

そして、昔話などの説話には、型といわれるものがあります。末子成功譚とか貴種流離譚とか、異類婚姻譚、難題婿、異界訪問譚、異類退治譚など。これらは、物語の姿を理解するのに有効な枠組みといえます。神話も、これらの型と関係が深い。ちなみに、今挙げた型のうちのほとんどが、『いなばのしろうさぎ』を含む大國主の一連の神話にも認められます。こういう物語の型に、神話を通して親しんでおくことで、長じた後、小説などを楽しむときに生きるのではないか。もちろん小説では、こういった枠組みをいかにずらすかということが、課題になってくるのだと思います。そうだとすると、枠組みというものがベースにあって、その上でそれをどうするか、という問題になっていくのではないかと思えます。物語の姿の基本のき、というものを知るのに、古事記神話というのは割と有効な教材になるのではと私は考えています。

切り取り方にもよりますが、古事記神話は、一つ一つの物語が比較的長い。そしてその一つ一つの物語の中にはさまざまな型が見られます。だから、シンプルな物語からより複雑な物語への橋渡し、具体的に言うと、絵本から幼年文学、そして児童文学への橋渡しになり得るのでは、工夫次第で幼い子どもの読書の幅を広げる素材として生かすことができるのでは、と考えています。ただし、工夫の際には、想定読者の発達段階を意識することが強く求められます。『古事記』を子どもにも楽しませることに対しては賛否両論ありまして、『古事記』の研究者の中には、『古事記』を子ども向けにということ自体に無理があるとはっきり言われる先生もいらっしゃいます。

私は、『古事記』をまるごと子どもに伝えるのは難しいだろうと思うのですが、その一方で、分かりやすくリライト

トしたものと出会わせるというのは、物語世界を知っていく入り口として有効なのでは、という気持ちがあるので、幼年向けの再話のスタイルの研究のようなことをしているわけです。

具体的な話に落とし込みたいのですが、残り時間が少なくなってしまうので、最後に、幼い子どもが古事記神話に親しむための工夫のポイント。私は四つぐらいあると考えています。

一つ目は、物語の長さや複雑さをどう扱うか。二つ目は原典の姿を伝えながら、古代文学ならではの要素をどう扱うか。三つ目は、再話作品の特徴を知った上で、教育や保育への生かし方をどうするか。それから四つ目として解釈等の正確さに留意する必要があるということです。

最初の、物語の長さや複雑さへの配慮については、先ほどから言っていますように、『古事記』の上巻を丸々幼年期の子ども向けにリライトするのは極めて難しいと思います。一部分のみ切り出す、シリーズ絵本化するなどのやり方が妥当だと思いますが、この場合、前からの話のつながりがわかりにくくなる。ヤマトノオロチ神話をリライトするときにはこの問題が出てきます。スサノオが高天原で大暴れをして、追放されて、その後、出雲へ降りてきて、平然とオロチ退治をして英雄になります。オロチ退治のところだけを取り上げると、スサノオの変化の面白さが伝わらない。それををどうするかということになります。

構造で言うと、『いなばのしろうさぎ』の神話。この話は難しいです。舞台があちこちに変わります。時間の流れも回想シーンがあるために一方向ではありません。本当に難しい。これをどうするかという問題があります。各再話はその辺りについていろいろな工夫をしています。

それから二つ目の原典の姿の伝え方。ヤマトノオロチ退治神話では、高天原から降りてきたスサノオは、自分の娘

をヤマタノオロチに生贄に捧げなければならぬということに泣いている老夫婦とその娘と出会います。普通、泣いている人を見かけたなら、どうしましたかと聞きませんか。だけれども、『古事記』では、名前を問う、おまえたちの名前を名乗れと言っているんです。この流れはわれわれの感覚からすると、大人でもわかりにくいと思いますが、『古事記』のスサノオとアシナヅチでは、スサノオの方が立場が上です。下の者に先に名乗らせることで上下関係を明らかにしているのですが、それは大人でも理解しづらい。子どもならなおさらです。そういう要素をどう扱うか。

あと、これも難しい問題なのですが、国生み神生み神話の中で、イザナキ、イザナミが結婚する時、最初、女性のイザナミのほうが夫に声をかけます。それがよくない、言い直しをしなければ、というくだりがある。これをそのまま絵本に入れると、今はジェンダーバイアスにとらわれないようにということが保育所保育指針にも載っている時代です。ので、どうなのかという問題が出てくる。

ほかには、国生み神生みの神話には、神の名前がずらりと並ぶ部分がある。そこには意味があるのだけれども、それをそのまま取り入れると子どもは飽きる。こういうところをどうするかという問題もあります。これも各再話作品ではいろいろ工夫がなされています。

三番目、再話作品の特徴を知った上で、保育に生かすことについて。原典の姿、長さや複雑さの扱い方も踏まえ、オリジナルな部分をどう評価するか。先ほど、吉永先生が『古事記』にはない部分を取り入れたものがあると言われましたけれども、多分、谷真介さんの絵本じゃないかと。『塵袋』という後世に成立した本の中に『いなばのしろうさぎ』の伝承が入っていますが、冒頭、その部分を取り入れていると思われまます。そして後ろのほうは、恐らくしろうさぎにまつわる神社の社伝か何かを入れているのではないかと。オリジナル色が強い絵本ですが、面白くて

良い作品だと私は思います。

幼年向きの再話の場合には、原典に近ければ近いほどいいということではなく、多様なアプローチの仕方がありうるかと私は考えていることだけ、述べておきたいと思います。

最後、原典の解釈等の正確さ、ここは留意したほうがいいと思っています。例えば、しろうさぎに仕返しをしたのはワニかサメかというのも大きな問題だと思います。ほかに、『いなばのしろうさぎ』神話では傷を癒やすときにガマを使いますが、絵本や歌ではガマの穂とか、穂綿となつているものが多いですが、実は、ガマの花粉です。『古事記』の原文に書いてある漢字「蒲黄」は「ホオウ」と読みます。これは花粉です。写真をお見せしますと、



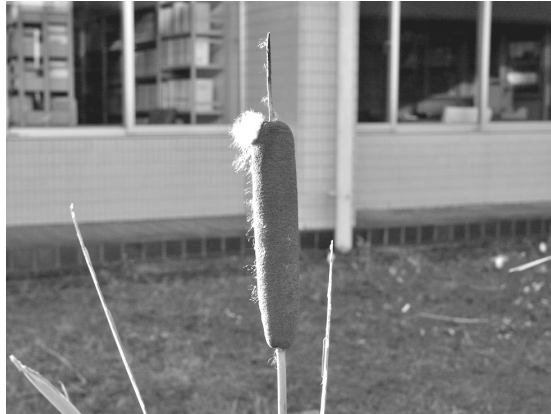
写真①

初夏、ガマはこんな感じになります（写真①）。上の、茶色い部分がおしべで、下の緑色のつるりとしたところがめしべです。初夏のガマのおしべをはじくと花粉が飛びます。（写真②）しろうさぎが傷薬にしたのはこれです。漢方薬としても使われているそうです。夏になるとめしべが太くなり、おしべの部分の細くなります。秋になると穂がはじけて、穂綿が出てきます。（写真③）写真は、群馬県立女子大学の名誉教授の北川先生からお借りしました。

幼い子どもが古事記神話に親しむための工夫、四つお話をいたしました。が、すでに時間が過ぎてしまいました。後半、走り走りになりました失礼いたしました。ご清聴ありがとうございました。



写真②



写真③